

アブダクション、ヒューリスティック、エンテュメーマ ～推意の説明に貢献する3つのキーワード～

山 本 英 一

(関西大学)

はじめに

コミュニケーションの問題を考える上で厄介な点は、文字通りの意味にとどまらず、場面・文脈に応じた言外の意味を含む場合が多いことである。言外のメッセージを読み解く試みは、〈語用論〉(Pragmatics)の守備範囲とされるが、字面に現れない情報を引き出すプロセスを明らかにする上で、そこに絡む推論行為を観察・熟考することを避けて通ることはできない。そこでは、その**推論**とはどのようなスタイルなのか、論理の問題として捉える必要性が生じる。一方で、論理とはいえ、コミュニケーションに現れるプロセスは、いちいち立ち止まって考えるようなものではなく、理解の**即時性**が重要であり、熟考を要求する論理学の世界とは一線を画すべきであろう。また、相手の共感も得ながら情報を伝えるという観点から、そこには考慮すべき**レトリック**の問題も潜んでいる。本論では、言外の意味解釈にまつわる語用論の話題を取り上げながら、推論・即時性・レトリックのそれぞれに対応する、アブダクション・ヒューリスティック・エンテュメーマの観点から、言外の意味としての推意が産出・理解される過程を考える。

隠れた情報とその回復

まずは、最短の小説と言われる以下の記号列を考えよう。

(1) For sale: Baby shoes, never worn¹

(売ります、ベビーシューズ、未使用)

これが小説として成立するためには、読者が想像力を働かさなければならない。つまり、売りに出された一足のベビーシューズが、なぜ未使用なのかと。おそらく、私たちの多くが、細い紐がきっちり結ばれた靴がぼつんと置かれている、そしてその靴を履くはずだった小さな子どもの姿が見えない光景をイメージするのではないか。²そこからは、子供を亡くし、悲しみにうちひしがれた夫婦(あるいは女性)の姿が浮かび上がってくる。

この例は、完全な文ではなく、断片的メッセージであるがゆえに、ベビーシューズが「なぜ新品のままなのか?」とか、「なぜ売りに出されているのか?」のように、表には現れていない情報を読者が補わなければストーリーが完結しない。つまり、読者が想像力たくましく、言い換えれば、背景知識を駆使して、空白を埋めなければならない。ただし、それはこの断片に誘発された、あくまでも読者の推論にすぎないわけで、多くの読者が同じイメージに到達するという事実にもかかわらず、悲しみにうちひしがれた夫婦(あるいは女性)の姿というストーリーは正しいことが保証されたものではない。たとえば、(物語性は

著しく損なわれるが) よちよち歩きを始めた我が子のために買った靴のサイズが合わなくて、それを夫婦が売りに出ただけかもしれない。推論を伴う解釈は、そのように不確実なものなのである。

さて、完全な文である次の例はどうだろうか。

(2) サリーはアイロンをかけたので、シャツはきれいだった。

(3) サリーがアイロンをかけたので、シャツはしわくちゃだった。³

シャツにアイロンをかけると、「シワがなくなる」というのが、私たちの常識(=背景知識)である。よって、(2)はその知識と整合するので、問題なく解釈は完了する。ところが、(3)はその常識と真っ向から対立するため、私たちはアイロンをかけることによって逆にしわくちゃになる理由を探そうとする、つまり推論する。そこから、(おそらく)「サリーはアイロンがけが苦手なのだ」という情報を引き出すのである。

困ったことに、文としては完結してはいるものの、(1)と同様に、推論が関わった瞬間に、その解釈は不確実になる。実際、(3)の場合、上記の解釈以外に、たとえば「サリーはまだ5歳児だ(からアイロンが苦手だ)」も可能である。⁴

ことほどさように、不完全な記号列の解釈はもとより、単独の文の解釈でも、その一部が背景知識と整合しない場合、意味のまとまりを求めて、私たちは穴埋め作業、すなわち推論を差し挟もうとする。そして、推論が絡むと解釈は不安定になる。あるいは、その解釈が間違いであることを指摘されて、はじめて推論プロセスが私たちの頭の中で無意識に起動していたことに気づく場合もある。次の文がそれに該当する。

(4) Billy went to the top of the Empire State Building and jumped.⁵

おそらく、誰もがこの文から「ビリーがエンパイア・ステートビルから飛び降りた」と考えるだろう。そこには、“off the edge of the building”という、いわば空所補充、つまり推論が働いている。しかし、その推論の正しさは、やはり100%担保されているわけではない。「ビリーがエンパイア・ステートビルの屋上で跳躍した」だけかも知れないのだ。(もしその解釈が意図されているとして) そのように種明かしされてはじめて、「ビルから飛び降りた」という解釈が、(ほとんどの場合、正解であるとはいえ) 私たちの勝手な思い込み(=推論)であったことに気づかされるのである。

私たちは、それほどまでに推論に頼りながら、断片的な記号列はもちろんのこと、文法的には適格な文さえも、ひとつのまとまりある情報として解釈しようとする性向をもっているのだといえる。⁶

推意の算定と特徴

このように、推論を介して産出される(解釈される)意味について、ある一定の条件を満たしたものは<推意>と呼ばれる。誌面の都合で、詳細は省くが、ポイントは以下の通りである。

言語哲学者 Grice によれば、柱となる大原則があり、その下にある公理群にしたがい私たちはコミュニケーションを行なっている。

大原則: コミュニケーションの目的・方向性にしたがい、話し手・聞き手が応分の貢献

をせよ（協調の原則）。

公理群：4つの公理（「質」「量」「関係性」「様態」）にしたがって情報を提供せよ。⁷
この大原則と公理群にしたがっている限り、発話は<文字通りの意味> (Literal meaning) を伝えていると考える。しかし、何かの理由で、話し手がいずれかの公理に違反したとき、しかも違反が明確にわかるような形で発話がなされたとき、そこには言外の意味 (Implied meaning) が込められており、聞き手はそれを推論することが求められる。推論により得られた意味ゆえ、これを<推意> (Implicature) と呼ぶ。たとえば、次のBの発話は「質」の公理の違反例である。

(5) *The speaker has accidentally locked herself out of her house. It is winter, the middle of the night and she is stark naked:*

A: Do you want a coat?

B: No, I really want to stand out here in the freezing cold with no clothes on.⁸

つまり、真冬の深夜に真っ裸のまま戸外に立たされているBが「このまま服を着ないで立っていたい」はずがない。明らかに（「本当のことを言え」という）「質」の公理に違反していることが、聞き手のAにもわかる。そこでAは推論をすることで、たとえば「（「上着持ってくださいか？」などという）間抜けなことを言っていないで、さっさと戸を開けて中に入れてちょうだい！」という言外の意味、すなわち<推意>を読み取る、というわけである。

ここで気をつけなければならないことは、推論の背景には考慮すべき文脈が必ず存在するという点、そして推論はあくまでも推論であって、結果として得られる推意が、100%と正しいとは言い切れないという点である。たとえば、Aが屋内にいと想定すれば、「さっさと戸を開けて中に入れてちょうだい！」という解釈は（その文脈では）正しいけれど、Aがたまたま車で通りかかったのだとすれば、「さっさと車に乗せてちょうだい！」という意味だったかも知れない。つまり、前節で述べたように、推論が絡むと解釈は不安定になるのである。⁹

広義の推意

前節の冒頭で「ある一定の条件を満たしたもの」と断り書きを添えたように、Griceのいう<推意>とは、遵守すべき公理、言い換えれば、規範となる流れからの逸脱が明らかな場合に誘導される（言外の）意味といえる。このことを踏まえて、例文(1)、(3)、(4)を見直してみよう。

例文(1)は、わずか6語で小説が書けるか否かに作者が挑戦した例ともいわれるので、そもそも規範となる流れは無視されており、Griceの公理を適用するならば、「過不足なく情報を提供せよ」という「量」の公理に違反しているといえよう。それが契機となって、幼子を失った夫婦（あるいは女性）が発したメッセージという解釈が浮かび上がってくる。

それに対して、例文(3)はどうだろうか。アイロンがけの結果、シャツがきれいになったという(2)と対比すると、(3)の不自然さが際立つけれども、たとえば、「サリーはアイロンがけが苦手だ」という情報を、話し手と聞き手が共有していたとすれば、公理違反は存在しない。ゆえに、言外の意味を模索する必要なく、文字通りの意味レベルで、発話解釈の

プロセスは終了する。問題は、そのような情報が共有されていない場合である。つまりなぜシャツがしわくちゃなのか、その理由を考える必要が生じる。

例文(4)では、さらに事情は複雑である。なぜなら、表面上、どう見ても公理違反はないため、あえて(「屋上でジャンプしただけ」と)種明かしされるまで、「ビルから飛び降りた」はただ一つ確かな解釈であり続け、それが(勝手な)推論にすぎないことさえ、聞き手は気づかない、つまり意識にのぼることさえない、からである。¹⁰

このように、例文(1)はともかく、共有情報のない場合の例文(3)、さらに実は正解となるはずの解釈が、放っておくと聞き手の意識にもものぼらない例文(4)は、Grice のいう公理からの逸脱が明々白々とは言い難い。それにもかかわらず、いずれも意図されたメッセージを正しく導き出すには推論に頼らざるを得ない。そして、推論に依存するがゆえに、聞き手が理解した(と思いついた)メッセージが、実は話し手の意図とは異なる(すなわち、(1)では、靴を売りに出したのは(幼子が亡くなったのではなく)「サイズを間違えて購入した」から、(3)では(アイロンがけが苦手なのではなく)「サリーが5歳児だ」から、(4)では(ビリーが飛び降り自殺したのではなくて)「屋上でジャンプしただけ」という)可能性をはらんでいる。この点は、Grice が定義する<推意>との共通点であり、本論では、公理違反の明白さの基準を緩め、(1)、(3)、(4)のような事例も、議論のために、広義の<推意>として扱うことにする。

アブダクション

さて、そのような推論を考えるにあたっては、そのプロセスを起動させるトリガー(誘引)があると考えるのが自然である。¹¹ Grice のいう明白な公理違反が、そのトリガーの典型といえる。たとえば(1)では、「量」の公理違反がトリガーとなって、「なぜ、売りに出されたベビーシューズが未使用なのか」、あるいは「なぜ未使用のベビーシューズが売りに出されたのか」という問いへの答えを模索する作業、すなわち推論プロセスが始まる。一方、(3)では明白な公理違反は察知されないが、「アイロンがけの結果、シャツがしわくちゃになる」という、私たちの常識に反する情報が契機、すなわちトリガーとなって、「なぜアイロンをかけたワイシャツが、しわくちゃなのか」という問いへの答えの模索が始まる。さらに(4)では、高層ビルの屋上に行くことと、そこでジャンプすることの因果関係、つまり「なぜエンパイアステート・ビルの屋上でジャンプしたのか」という問いへの答えを(無意識のうちに)模索している。

ここで、いずれのケースにも共通することは、実際に目の前にある事象をもとに、その原因・理由を探すための推論が関わっていることである。言い換えると、私たちは If H ((前件) 原因・理由)、then C ((後件) 結果) の図式を完成させたい。具体的には、以下において

- (6) (H) → 「未使用のベビーシューズが売りに出される (C)」
- (7) (H) → 「アイロンがけをすると、シャツがしわくちゃになる (C)」
- (8) (H) → 「エンパイアステート・ビルの屋上でジャンプした (C)」

それぞれ、(H) の内容を言い当てる(推論する)ことが求められる。つまり、論理式の後

件 (C) を根拠に、その前件 (H) を代入する作業が必要となるのである。

さて、このように、ある事象 (C) に遭遇した際、それをもとに、一つの仮説 (H) を立てる推論は、<アブダクション> (Abduction) (あるいは仮説的推論) と呼ばれる。¹² これは、科学的な発見など、画期的な発見をもたらす推論様式ともいわれ、たとえば、ニュートンの万有引力の発見がこの推論に負っている。

(9) C: リンゴが木から落ちた (事象)

H: 引力が働いているにちがいない (仮説)

(H→C、あるいは (H ⊃ C))

ニュートンの仮説は、後にその正しさが検証されたわけであるが、一般的には、あくまでも H は、観察した事象 C に基づく 仮説にすぎず、これが必ず正しいという保証はない。形式論理的にも、この推論は<後件肯定の錯誤> (Fallacy of affirming the consequent)¹³ を犯しているとされ、引き出された結論 (= 仮説) は、(そうでないことを示す) 証拠を追加することで、いつでも破棄することができるのが特徴である。

ところで、アブダクションは科学的発見に限らず、日常の生活にも盛んに現れる。¹⁴ たとえば、「妻が不機嫌だ (C)」という事象から、「妻の誕生日プレゼントを忘れた (H)」(① C; ② H ⊃ C; ③ ∴ H) という仮説を立てるのもアブダクションに他ならない。この結論 (仮説) は正しいかも知れないが、もしかすると「妻はただ歯が痛かった (から)」かも知れない。その場合、「妻の誕生日プレゼントを忘れた (から)」という結論 (仮説) は破棄される。仮説であるがゆえに、このように結論は一つに定まることはなく、検証が行われるまで、その正しさを自信をもって主張することはできないわけである。

先の例に戻るならば、(6)では「夫婦が幼子を亡くしたから」以外に、「靴のサイズを間違っ買って買ったから」、(7)では「アイロンがけが下手だから」以外に、「5歳児がアイロンかけしたから」、(8)では「飛び降り自殺するため」以外に、「屋上で運動するため」という仮説を立てることが、それぞれ可能である。いずれも結論が不確定な (= 一つに絞り込めない) のは、依拠している推論様式がアブダクションだからである。

演繹的推論の落とし穴

さて、発話の背景にある推意を読み解くために、本論ではアブダクションの存在を提起しているが、これと対照的なのが、次のような演繹的推論である。

(10) If the party broke up late, then it was a success. (大前提)

The party broke up late. (小前提)

∴ The party was a success. (結論)¹⁵

すなわち、“X → Y” という前提に “X” (前件) という情報を放り込むことで、∴ “Y” (後件) という結論を導き出す。さきほどのアブダクションが、“Y” (後件) から “X” (前件) を仮説として導き出すのとは真逆の推論スタイルである。¹⁶ アブダクションが<後件肯定の錯誤>を犯した正しくない推論であるのに対して、演繹法は前提に誤りがなければ、必ず結論は「真」となるゆえ、形式論理としては正しい推論とされる。

実は、推意の問題を考える上で重要な Grice の貢献は、「あからさまな公理違反がトリ

ガーとなって推意を模索するプロセスが起動する」ことを指摘した点にあって、肝心のプロセスがどのように機能しているかについて何も語っていない。推論プロセスが、いわばブラックボックス化しているのである。その不備を補うのが、Sperber and Wilson の提案する〈関連性理論〉(Relevance Theory) で、それは演繹法に基づいて、この推論プロセスを説明しようとする。たとえば、

(11) Peter: Is George a good sailor?

Mary: ALL the English are good sailors.

のメアリの発話の説明として、

(12) All the English are good sailors. (大前提)

George is English. (小前提)

∴ George is a good sailor. (結論)¹⁷

「A がイギリス人ならば、A は船酔いしない (If X, then Y)」に対して、「ジョージはイギリス人である (X)」というピーターとメアリの共有情報を掛け合わせることで、「ジョージは船酔いしない (Y)」を導き出される。Sperber and Wilson によれば、結論 (Y) は(彼らの言う)〈推意〉であり、それは他ならぬ演繹法が生み出す言外の意味とされる。

実は、前節で見たアブダクションの例も、これと同じ演繹法のプロセスに無理やり押し込むことができる。たとえば例(1)は次のようになる。

(13) もし A が靴を売りに出したなら、A は幼子を亡くした。(大前提)

A は靴を売りに出した。(小前提)

∴ A は幼子を亡くした。(結論)

アブダクションのはずだった思考の流れが、このように、いとも簡単に演繹法にすり替わってしまう。ところが、この説明の仕方は少なくとも次の2つの問題を抱えている。一つは、「靴を売りに出した」という情報をもとに、「幼子を亡くした」という意図されたメッセージ(つまり結論)を探し出すはずだったにもかかわらず、いつの間にか大前提の中に結論が含まれていること。もう一つは、「靴を売りに出した」という情報から一つだけの結論に絞り込めない、つまりこの事例では「靴のサイズがあわなかったから」という解釈も可能であるにもかかわらず、演繹法に依存した瞬間に他の結論(=解釈)が排除されてしまうこと。¹⁸つまり、推意が生み出されるメカニズムを説明するために演繹法を用いることは、きわめて不適切なのである。¹⁹アブダクションではなく、演繹法に頼って推意を説明したくなるのは、まさにそれが論理的に正しいからであるが、逆にその論理的正当性が落とし穴になってしまうことに注意しなければならない。

エンテュメーマ

前節では、前提の中に結論がすでに含まれている演繹法は、(結果論としては正しいが)発話の解釈に至るプロセスを説明するには不適切で、いわば話者のメッセージの謎解きとしてのアブダクションの方が相応しいことをみた。ここで、二つの推論様式を整理しておこう。

(14) 《演繹法》

If X, then Y (大前提)
X (小前提)
∴ Y (結論)

(15) 《アブダクション》

C (観察)
If H, then C (仮説)
∴ H (結論)

推論の流れが相互に逆向きで（それゆえ、アブダクションは「逆は必ずしも真ならず」、つまり後件肯定の錯誤を犯しているのではあるが、ともに<三段論法> (Syllogism) の形式をとっていることに、ここでは注目したい。

それを踏まえて、トランプ大統領の次の発言を考えてみよう。

(16) They've taken our jobs, they've taken our base, they've taken our money, and I love China, they get along great with me, I told you I have all these people, I do business with China, they agree with me. They can't —. ²⁰

ポイントとなる「彼らは—できない」を (Y)、その（長い）前段「中国は我々の雇用を奪い、基地を奪い、金を奪ってきた。だが、私は中国が大好きだ。私は彼らとうまく付き合ってきた。私はああいう連中と、中国とビジネスをやっているし、彼らも私と同じ考えだ」

(X) とすると、上記(14)と同じ三段論法に依拠している。ただ問題なのは、肝心の結論 (Y) の部分が「彼らは—できない」という空白になっている点である。空白を埋める仕事は、聞き手に任せられている。先程の様式では、次のようになる。

(17) If X, then _____ (Y) (大前提)
X (小前提)
∴ (Y) (結論)

さて、ここで興味深いのは、大前提（しかも、その一部）が不完全な形で提示されたとき、聞き手は三段論法のプロセスにしたがい空白を埋める、すなわち、ここでは Y（部分を含む大前提）を完成しようとする。しかし、この作業自体、推論にすぎないため、答えが一つに収斂する保証はない。実際、ある調査では、上のトランプ大統領の発話から、Y の解釈として次の2種類の推論が得られたという。²¹

(18) They can't believe how intellectually inferior we are.

(19) There's no way they can disagree with him because of his working relationship with them.

一人は「中国人には、われわれアメリカ人がこれほど劣っているとは信じられないだろう」と、別の一人は「仕事上の取引があるのだから、中国人はトランプ氏に反対できるはずがない」と推論した。つまり、同じ発話が三段論法の形式に流し込まれたところで、背景知識や思想信条の異なる聞き手が推論を介して不足する情報を補うため、その解釈は見事にわかれてしまうのである。

このように、発話の解釈が二つ以上存在すること、すなわち<多義的>（あるいは<両

義的>) (Ambiguous) であることは、コミュニケーションを円滑に遂行する上では、きわめて不都合なことといえる。しかし、その一方で、聞き手に解釈を委ねるような曖昧な物言いを意図的に採用し、相手に行間を読ませる行為は、言質を取られることなく相手を説得させたい話し手にとっては、この上なく都合のよい話法でもある。²² なぜなら、発話の解釈に聞き手を積極的に関わらせることで、「話し手も自分と同じ前提で喋っている」という) ある種の共感を暗黙のうちに植え付け、他方、その内容に支障が生じた時には、(明示的には何も示していないのだから)「そんなことは何も言っていない」と責任を回避することができるからである。²³

トランプ大統領の例では、聞き手に小前提だけが伝えられ、肝心の大前提の一部と結論が不在となっている。このように、結論はもとより、三段論法を構成する前提(大前提・小前提)をわざと空白にして、聞き手に推論させる手法は、アリストテレスが<エンテュメーマ> (Enthymeme) と呼んだ重要な弁論術の一つなのである。²⁴ これには、大前提、小前提、結論いずれかが欠如するタイプがあり、それぞれ第一次 (First-order)、第二次 (Second-order)、第三次 (Third-order) エンテュメーマとして区別される。

(20) First-order Enthymeme (大前提の不在)

“Joe is liar, so Joe is a coward.”

大前提: _____

小前提: Joe is a liar.

結論: John is a coward.

→回復された大前提: If X is a liar, then X is a coward)

(21) Second-order Enthymeme (小前提の不在)

“Every liar is a coward, so Joe is a coward.”

大前提: If X is a liar, then X is a coward.

小前提: _____

結論: Joe is a coward.

→回復された小前提: Joe is a liar.

(22) Third-order Enthymeme (結論の不在)

“Every liar is a coward, and Joe is a liar.”

大前提: If X is a liar, then X is a coward.

小前提: Joe is a liar.

結論: _____

→回復された結論: Joe is a coward.

いずれも、発端となる文(発話)の字面を解釈するだけでは、話し手の意図するメッセージは伝わらず、三段論法に則って、聞き手が大前提、小前提、もしくは結論を補う作業が求められる。²⁵

エンテュメーマで気をつけなければならないことは、三段論法に従っているゆえに一見すると論理的に思えても、聞き手によって補われた情報が常に真とは限らない点である。たとえば、

(23) 大前提：_____

小前提：Xは熱がある。

結論：Xは病気である。

から導き出される大前提「もしXに熱があるならば、Xは病気である」は（私たちの常識に照らし合わせて）真である。ところが、

(24) 大前提：_____

小前提：Xは顔色が悪い。

結論：Xは妊娠している。

からは「もしXの顔色が悪ければ、Xは妊娠している」という大前提が同様に導き出せるものの、（顔色が悪い理由は、妊娠している以外にもあるので）これは偽である。²⁶ 先のトランプ大統領の例が始末に悪いのは、結論に直結する大前提の後件が抜け落ちているため、聞き手は結果として結論と大前提の後件の両方を補うという大きな負担が求められる点である。反対にそこでは、聞き手は自分の思想・信条に照らし合わせて、それをいかようにでも補う自由が認められるわけで、大前提に含まれる前件と後件の論理的必然性を考慮に入れる厳密さとは、もとより無縁の世界といえる。

エンテュメーマとアブダクション

三段論法の大前提、小前提、結論のいずれかが欠けたものをエンテュメーマと呼ぶことがわかったところで、アブダクションに話を戻そう。アブダクションも一種の三段論法であり、大前提（If H, then C）の後件（C）を根拠として、前件（H）を推論（＝仮説形成）するとともに、同時にこれを結論とする推論スタイルであった。トランプ大統領の発話のように、大前提（If X, then Y）の前件（X）だけが与えられ、その後件であり結論でもある（Y）の両方が欠如し、それらを補おうとする推論手法をエンテュメーマと考えるならば、大前提に含まれる前件と、それと結びつく結論が欠如して、これら（要するに仮説）を補おうとするアブダクションも、一種のエンテュメーマといえる。その意味において、例文（12）でも、すでに結論としての後件を含む大前提（If A is English, then A is a good sailor）に対して、ピーターとメアリの共有情報と考えられる小前提（大前提の前件）

（George is English）を補充することによって、結論（George is a good sailor）が導き出されており、これもまたエンテュメーマの例に他ならない。²⁷ 考えてみれば、語用論で話題になる推論絡みの議論は、どこか欠けた部分を補うプロセスが関与しているわけで、すべてエンテュメーマの問題であるともいえるだろう。

さて、いましがた話題になった(12)のように、話し手と聞き手の共有情報である小前提が省略される事例は、その情報を回復することが（推論と言えるほど大掛かりなプロセスが介入しているとは考えられないほど）容易で、エンテュメーマの理想像ともいえる。しかし実際のアブダクションでは、(6)～(8)の例にあったように、発話の解釈で求められるのは、大前提における後件（C）のみが提示され、そこから聞き手が仮説（If H, then C）、つまり大前提そのものを構築すべく前件（H）の候補を探し出すことである。この場合、Hの内容は、話し手と聞き手の共有情報というよりも、話し手が常識、いわば百科全書的

知識を含むすべての情報を総動員してはじめて特定されるものである。(6)の例でいうと、「未使用のベビーシューズが売りに出された(C)のはなぜか」という問いから、「幼子を失った(H)」という答えを引き出す、いわば推理のプロセスである。しかも、その答えが真である保証はどこにもない。(6)では、「親が靴のサイズを誤って買ってしまった」の可能性も排除できなかったことを思い出したい。

アリストテレスが目指した弁論術としてのエンテュメーマとは、話し手が聞き手を説得する手段として注目された話法である。したがって、省略された情報を回復するために聞き手に過度の負担を強いてはならない。効果的なレトリックとして、すぐれたエンテュメーマとなり得るのは、聞き手がみずから補うことのできる情報の省略なのだ。²⁸ 補うことができるレベルの、いわば匙加減が難しいところだが、すでに述べたように、うまくいけば、話し手の論理展開に聞き手をも巻き込むことになり、それだけ聞き手の満足度も高まる。しかし、時々刻々と展開される発話を処理することが求められる日常の会話(談話)のレベルではどうだろうか。そこでは、一瞬たりとも立ち止まることは許されず、相手を説得するのが目的である弁論という高度に知的な作業と違って、かなりの即時性が求められる世界といえよう。

直感型アブダクションとヒューリスティック

一般にアブダクションとは、弁論術でいうエンテュメーマの問題として処理することが可能だとはいえ、少なくとも本論で関心のある発話の解釈に関わるアブダクションについては、即時性という要素が加わった時点で、弁論術とまったく同列で扱うことはできそうにない。実際のところ、アブダクションには2つのタイプがある。²⁹ 一つは<熟慮型アブダクション>(Deliberate abduction)、もう一つは<直感型アブダクション>(Intuitive abduction)である。前者は、先にも言及したニュートンの万有引力発見であったり、また探偵が残された手掛かりを頼りに犯人を割り出す謎解きであったり、因果関係の検証に値し、その検証に十分耐えうる推論プロセスである。³⁰ それに対して後者は、いちいち因果関係の検証を求められる間もなく、まさにリアルタイムでテンポよくリアクションするときに作動する推論プロセスといえる。直感型と言われる由縁である。

さて、このように直感的なリアクションとしてのアブダクションの背景には、どのような力が働いているか、本論の最後の問いとして考えてみたい。たとえば、わかりやすい例として(3)では、「アイロンをかけたワイシャツが、(本来きれいになっているはずなのに)なぜしわくちゃなのか」への答えを模索するケースを思い出そう。本来であれば、「衣類にアイロンをかけるとシワが取れる」というのが私たちの常識である。別の言葉でいえば、私たちの期待に沿ったシナリオのようなものである。これは、Tversky and Kahnemanの言葉を借りれば、<代表性ヒューリスティック>(Representativeness heuristic)と呼ばれる。³¹ たとえば、「スティーブは内気で引込み思案だが、相談にはいつでも乗ってくれる。他人のこと、世間で起こっていることにはあまり関心がないが、いつも小綺麗にしている物腰が柔らか。秩序や型にこだわり、細かい点に気を遣う」という記述を与えられた後、「スティーブの職業は次のどれでしょうか：農業従事者、セールスマン、パイロット、

図書館司書、内科医？」と尋ねられると、多くの人は「図書館司書」と答えるという。論理的必然性はないが、人物記述が図書館司書の代表的なイメージに合致するからである

ちなみに、ヒューリスティックとは、「不完全なことが多いけれど、困難な問題に対する適切な答えを見つけるのに役立つ単純な手続き」と定義される。³² この（不完全な）単純さが、まさに直感的リアクションの原動力となる。アイロンがけの結果、シャツのシワが取れたならば、このヒューリスティックにしたがっているわけで、そのことさえ私たちの意識にはのぼらぬまま、解釈が進行する。ところが、アイロンをかけたにもかかわらず、逆にシャツがしわくちゃになったとすれば、通常の解釈手続きが通用しない。このことがトリガーとなって、私たちは発話の再解釈に向かう、つまり別のシナリオを用意することが求められる。

再解釈では、アイロンがけにまつわる私たちの一般的理解（代表性ヒューリスティック）が破棄され、自分が知っている個別の事例が検索される。再び、Kahneman and Tverskyの言葉を借りるならば、<利用可能性ヒューリスティック> (Availability heuristic) の出番であるこのヒューリスティックは、たとえば、英語で「r で始まる単語」と、「r が3番目にくる単語」のどちらが多いかを聞いたとき、ほとんど人が前者を選ぶときに使われる。それは、前者の方が後者よりも具体的な事例を思い出しやすい、つまり私たちにとって利用可能性が高いからだ、と説明される。³³

アイロンがけの事例で利用可能なシナリオは、「世間にはアイロンがけの苦手な大人もいる」である。ただし、繰り返しになるが、このシナリオによって形成される仮説は絶対的なものではない。たとえば、「一般に幼い子供（5歳児）はアイロンがけが苦手だ」のシナリオの方が妥当なケースもあり得る。どちらのシナリオが起動するかは、問題となる状況（文脈）で、話し手にとって、あるいは話し手が属する文化の中で、どちらが利用可能性の程度の高い情報なのかを鍵を握ることになる。

いずれにしても、弁論術のそれとは異なり、発話解釈レベルでの空所補充、すなわちエンテュメーマは、アブダクションに他ならず、それは直感型の推論プロセスであるがゆえに、確度は低く、導き出される結果の正しさは保証されない（つまり取消可能だ）が、即時性の高いヒューリスティックに依存していると考えるのが妥当だろう。³⁴

まとめ

Levinson (2000)は、通常は意識にのぼらないが、明らかに私たちが表現を解釈するときに利用していると思われるヒューリスティックを、<I 推意> (I-implicature) と<M 推意> (M-implicature) という用語でまとめている。³⁵

I 推意（膨らませ推意）

言葉で表された内容は典型的な事例である。³⁶

(25) John's book is good.

+> the one he read, wrote, borrowed as appropriate.

(26) The blue pyramid is on the red cube.

+> the blue pyramid is a stereotypical one.

「ジョンの本」と言えば、彼が「読んだ本」、「書いた本」、あるいは「借りた」本のように、私たちが本に言及するときの典型的なイメージであって、おそらく彼が「盗んだ本」でも「枕として使った本」でもない。また、「ピラミッド」と言えば、例の正三角錐（四角錐）のことで、通常は変形した構造物を指すと考える必要はない。これは、まさに<代表性ヒューリスティック>に他ならない。

M 推意（様式推意）

普通でない言い方をされた内容は普通ではない。有標のメッセージは有標の状況を示している。³⁷

(27) Bill caused the car to stop.

⇨ He did so indirectly, not in the normal way, e.g., by use of emergency brake.

(28) The corner of Sue's lips turned slightly upward.

⇨ Sue didn't exactly smile.

例文からも明らかのように、この推意は表現の仕方に起因する。(28)の“cause ... to ...”には、より簡潔な“kill”が、また(29)の“lips slightly turn upward”にも、よりわかりやすい“smile”が存在する。簡潔な方は無標であり、典型的な状況を表すために用意されていると考えると、複雑な方は有標の表現であり、それゆえ典型からの逸脱（典型的イメージを適用できないこと）が示唆される。(28)では、ビルが（足ブレーキではなく）「緊急ブレーキを使って車を止めた」、(29)では、スーの口元が（微笑みではなく）「微妙に歪んだ」という推意が前面に押し出される。³⁸

このように考えると、M 推意もまた、I 推意と同様に、典型的なイメージ、もしくはシナリオを基準にしているという点で、一般論であれば<代表性ヒューリスティック>、もしくは個別事例であれば<利用可能性ヒューリスティック>に準拠しているといえる。こうしてみると、言語表現に限定せず、それ以外の記号論的活動を視野に入れる、いわば広い意味でのコミュニケーション活動を説明するためには、Levinsonのように、活動の結果生じる推意に限定するよりも、その背後にある手順としてのヒューリスティックに焦点をあてて考えた方が、より一般性の高い議論になると思われる。

その上で、語用論の主要テーマである推意について議論した本論のポイントをまとめると、

- ① Grice に始まる協調の原理とそれにまつわる4つの公理群への違反がトリガーとなり、推意算定のプロセスが起動する
- ② 起動したプロセスを結論（推意）へと導く推進力として、確度は低いが、いわば直感的・即時的に情報を処理するヒューリスティックが関わっている
- ③ 関連性理論が強調する演繹的推論にもかかわらず、推意算定のプロセスとは、実際には論理的には正しくない（後件肯定の錯誤）とされる**アブダクション**である
- ④ アブダクションの要（かゝなめ）ともいえる仮説形成は、アリストテレスの弁論術に現れる**エンテュメーマ**にも通底する。ただし、弁論術が聞き手の知性・熟慮に訴える高度な知的作業であると考えられるのに対して、日常レベルの仮説形成は、聞き手の常識・直感に頼る現実的な手続きである

以上4点となる。発話解釈の即時性、直感性の基盤ともなるヒューリスティックを、多くの発話、あるいは広く意味伝達行為と紐付けること、言い換えれば、アブダクションと結びつけて考えることで、コミュニケーション研究の新たな眺望が開けてくるように思われる。

註

1. Wolf (2018:41).
2. フラッシュ・フィクション (Flash fiction) の代表例とされる、この6語から成る作品はヘミングウェイによるものともされるが定かではないようだ。
3. 西村 (2005:31-32). Bransford and Johnson (1973:389) にも同様の例がみえる。
The floor was dirty because Sally used the mop (サリーがモップを使ったので、床が汚れてしまった)。ここでも、「モップの使用が床をきれいにする (はずだ)」という期待が裏切られている。
4. 千野 (2017:121-122) .
5. Saul (2012:32-33).
6. ひとつのまとまりある情報は、「物語」あるいは「シナリオ」によって導き出されると言ってもよいかも知れない。
7. 詳細については、Grice (1989:24-37) を参照のこと。公理違反が明確にわかるような発話を Grice は Flouting と呼んでいる。
8. Thomas (1995:63).
9. <推意>はあくまでも推論の産物であるがゆえに、絶対的なものではない。聞き手の勝手な解釈になり得るわけで、言外の意味は(「そんなことは言っていない!」と言って)話し手が取り消すことができる。これを<取消可能性> (Defeasibility) という。Thomas (1995:82-84) を参照のこと。
10. このような推論は<デフォルト推論> (Default inference) と呼ばれる。
11. 何事もなければ、いわばオートパイロット・モードが機能しており、そのスイッチを切るのがトリガーの役目である。本論では、文字通りの意味解釈プロセスが、オートパイロット・モードといえよう。同様の考え方として、コミュニケーションのオートパイロット・モードを<真理デフォルト> (Truth-default)、すなわちコミュニケーションの大前提として「参加者はウソをつかない」に設定する Levine (2020:185 *et passim*) が参考になる。
12. 米盛 (2007:62).
13. よく言われる、「逆は必ずしも真ならず」のことである。
14. 推理小説のように、残された物証 (C) を手掛かりに、犯人を絞り出す (H) 行為もアブダクションに他ならない。具体的な事例は、山本 (2019) の第VI章を参照されたい。
15. Sperber and Wilson (1986/95: 112).
16. 形式論理として正当な演繹法とは真逆のプロセスを経るがゆえに、アブダクションは

<遡及推論> (Retroduction) と呼ばれる (米盛 2007:43)。

17. Wilson and Sperber (1994:98).

18. つまり、演繹法に依ることで結論を一刀両断に絞り込んでしまうという意味で、関連性の考え方は強すぎるのである。一方で、発話を解釈するにあたって、「人間が演繹法のような論理規則を適用するだけでなく、一人ひとりの聞き手が主観的なメンタル・モデルを構築・操作している」(Bara (2010:22))、すなわち幅広い推論を駆使してコミュニケーションに臨んでいると考えると、関連性の考え方は、別の意味で、十分に強いとはいえないとの評価もある。

19. 2つ目の問題点と重なるのが、推意の特性<取消可能性>である。推意が一種の仮説だと考えるならば、それが破棄される(=取り消される)ことは当然あり得る。この特性を考慮に入れない関連性理論や、その背景にある演繹法が、推意の説明にとっては致命的な問題点をはらんでいるにもかかわらず、広く学問的に受け入れられる土壌については、山本(2020)を参照されたい。また、<取消可能性>については、Grice (1989:44-46)、Thomas (1995:82-84)を参照のこと。

20. “Trump is a —: White House hopeful plays fill-in-the-blanks with voters” (Reuters, February 17, 2016.)

21. ロイター通信が、トランプ大統領の発言の映像をニューヨーク市立大学ハンター校の学生に見せた。(18)は政治学と哲学を専攻する学生の、また(19)は政治学を専攻する学生の、それぞれ解釈である。典拠は注 20. と同じ。

22. 注 9. の<取消可能性>を参照のこと。

23. 途中で言葉を濁したり、曖昧な表現を多用したりするトランプ大統領の話ぶりはいい加減に聞こえるかも知れないが、実は周到に計算されたレトリックとも言われる。詳しくは、注 20.の典拠を参照のこと。

24. アリストテレス(1992: 23-49)。エンテュメーマは「説得推論」とも訳される。

25. (20)~(22)は、いずれも Madden (1952:373) からの引用。

26. Madden (1952:370).

27. 小前提が欠けている場合、この例のように、その情報が話し手と聞き手にとって共有情報であること、あるいはすぐに共有情報だと聞き手にわかることが望ましい。ドリエウスが王冠ゲームで勝利したか否かを答える方法として、アリストテレスがあげた「ドリエウスはオリンピックで勝利した」という発話と、その背後に潜む「オリンピックは王冠ゲーム(の一つ)だ」という共有情報の例がそれにあたる(Aristotle (2018:9-10))。

28. Burnyeat (1994:23).

29. 山本(2019:142-143).

30. 「検証に耐えうる」とは、If H, then C の C (現象) に始まり、原因としての H (仮説) を形成(アブダクション)し、(科学的、あるいは経験的)検証の結果、最終的には「If C, then H の形(演繹法)に還元しうる」とも言い換えられる。

31. Tversky and Kahneman (1974: 1124).

32. Kahneman (2011:98).
33. この事例は、Tversky and Kahneman (1974: 1127) による。また、Kahneman and Tversky (1972: 451-2) も指摘するように、代表性ヒューリスティックは、事象のもつ一般的特徴(generic features)に基盤があるが、利用可能性ヒューリスティックは、個別の事例 (particular instances) に焦点が置かれている。
34. <直感型アブダクション>とは対照的に、<熟慮型アブダクション>は、したがって、このようなヒューリスティックには従わない。探偵が謎解きをするとき、読者が意表を突かれたと思うのは、探偵の推理手順が、素人の読者が依存するヒューリスティックとはまったく異なる、より複雑で熟慮を要するものだからである。
35. この他に、<Q 推意> (Q-Implicature) もあるが、本論とは直接関係がないので、ここでは割愛する。
36. Levinson (2000:37-8). 例文 (25), (26) も同じ。
37. Levinson (2000:38-9). 例文 (27), (28) も同じ。
38. もちろん、いずれも推意なので、(なぜ、そのような誤解を生む表現を選んだのかと責められるかも知れないが、)それを打ち消して、「ビルは普通に車を止めた」とか、「スーは微笑んだのだ」と言うことは可能である。

参考文献

- Aristotle (2018). *The Art of Rhetoric*, translated by R. Waterfield, Oxford: Oxford University Press.
- Bara, B.G. (2010). *Cognitive Pragmatics: The Mental Process of Communication*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Bransford, J.D. and Johnson, M.K. (1973). Consideration of some problems of comprehension, in W.G. Chase (ed.). (1973), pp. 383-438.
- Burnyeat, M.F. (1994). Aristotle on the logic of persuasion, in Furley, D.J. and Nehamas, A. (eds). (1994), pp. 3-55.
- Chase, W.G. (1973). *Visual Information Processing*, New York: Academic Press.
- Furley, D. J. and Nehamas, A. (eds.) (1994). *Aristotle's Rhetoric: Philosophical Essays*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Grice, H.P. (1989). *Study in the Way of Words*, Cambridge, M.A.: Harvard University Press.
- Kahneman, D. and Tversky, A. (1972). Subjective probability: a judgement of representativeness, in *Cognitive Psychology* 3, 430-454.
- Kahneman, D. (2011). *Thinking, Fast and Slow*, London: Penguin Books.
- Levine, T.R. (2020). *Duped: Truth-default Theory and the Social Science of Lying and Deception*, Tuscaloosa: The University of Alabama Press.
- Levinson, S.C. (2000). *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Madden, E.H. (1952). The enthymeme: crossroads of logic, rhetoric, and metaphysics, in *The Philosophical Review*, vol. 61, pp. 368-376.
- Saul, J.M. (2012). *Lying, Misleading, and What is Said*. Clarendon: Oxford University Press.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986/95). *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Thomas, J. (1995). *Meaning in Interaction*, London: Longman.
- Tversky, A. and Kahneman, D. (1974). Judgement under uncertainty: heuristics and biases, in *Science*, Vol. 185, No. 4157, 1124-1131.
- Wilson, D. and Sperber, D. (1994). Outline of relevance theory, in *Links & Letters 1*, 85-106.
- Wolf, M. (2018). *Reader, Come Home: The Reading Brain in a Digital World*, New York: Harper Collins.

- アリストテレス (1992). 「弁論術」. 戸塚七郎訳. 東京: 岩波書店.
- 千野帽子 (2017). 「人はなぜ物語を求めるのか」. 東京: 筑摩書房.
- 西村克彦 (2005). 「わかったつもり-読解力が見つからない本当の原因-」. 東京: 光文社.
- 山本英一 (2019). 「ウソと欺瞞のレトリック～ポスト・トゥルース時代の語用論～」. 大阪: 関西大学出版部.
- 山本英一 (2020). 発話解釈におけるアブダクション～忘れられた推論様式について～. 「英語表現研究」(日本英語表現学会) 第 37 号, 21-38.
- 米盛裕二 (2007). 「アブダクション: 仮説と発見の論理」. 東京: 勁草書房.